

現代資本主義研究会

京都大学 2007年12月15日

アンドレ・ゴルトツ（1924～2007）の労働論

若森章孝（関西大学）

1 理論的思想的歩み

A 労働疎外論と現代資本主義批判、社会主義への道

『疎外論の構造』（原書1959年、邦訳1971年）

資本主義的分業とその批判―現代資本主義批判

『労働者戦略と新資本主義』（原書1964年、邦訳1970年）

マルクス主義理論家としての地位を確立

窮乏化論にもとづく労働運動の伝統を批判、高度に発達した資本主義（フォーディズム）における労働者の変革欲求の分析。「ごまかされている消費者としての労働者と疎外された生産者としての労働者」を矛盾に陥れている壁の分析（邦訳82ページ）、資本主義によって分断されている生産者と消費者の再統一（邦訳83ページ）

（『エコロジスト宣言』（原書1975、1977、邦訳1983年））

B ポストフォーディズムとエレクトロニクス革命、労働の廃棄、労働者階級の分断、個人的存在と社会的存在の不一致―個人の自由と社会主義の再定義

『アドュー・プロレタリアート』（さらば労働者階級、原書1980年）

1) オートメ化と情報化―少数の安定的な特権的労働者と自己の能力以下（臨時的な性質の労働内容）で雇用される新プロレタリアートへの分裂

2) 二元論的社会 *societe dualiste* : 他律的領域と自律的領域の区別

マルクスの「必然の王国」と「自由の王国」に関する思想の継承

ゴルトツの主張「個人が全面的に社会的存在に一致することはありえない」

個人の自律性：他者の介在なしに生活を営むことができる程度によって測られる

『エコロジー共同体への道―労働と失業の社会を超えて―』（原書1983 邦訳1895）

1) マイクロ・エレクトロニクス革命―労働の廃絶・労働社会の終焉(64ページ)

必要労働量の急激な減少、労働はすでに労働者が原料と向かい合っていることを前提としない

2) 各人の活動の3つのレベル(121ページ)

①マクロ社会レベルの他律的労働：基本的必需品をまかなう

②ミクロ社会レベルでの協同組合やアソシエーションによる活動：地域レベルで自主的に組織される任意的かつ自発活動（市民社会の織目：望ましいもの、必要なものの定義）

③自律的活動：個々人や家族、小集団の計画や願望に対応する活動

個人の自由の開花「他律的な労働、任意的なミクロ社会の活動、自立的個人の活動のあいだを往復することは、各人のバランスと自由にたいする保障である」（122ページ）

「もはやすべての人びとが終日勤務労働を得ることは不可能であり、賃金労働は各人の

生活の重心でありつづけることも、主要な活動でありつづけることもできないという事実を認めない政治は、欺まんにすぎない」(67 ページ)

2 労働ユートピアからポストマルク主義的ユートピア・時間解放社会へ

『労働のメタモルフォーズ』(原書 1988 年、邦訳 1997 年)

1) 問題の所在：解放された時間にどのような意味を与えるか。経済的理性には、本来的にこの問いに答える能力がない 17

- ・ 経済合理性という、特異な合理性の危機 13
節約する economiser 欲求、生産要素をできる限り効率的に利用する欲求
- ・ 新たな成長を担うもの：経済的合理性の「再生産」領域への浸透 16
外食、清掃、介護、教育、保育などのサービスの工業化・コンピュータ化
レジャー活動：経済活動とは反対の合理性がある、道具的合理性を適用しにくい領域
自由な時間を生産するのではなく、消費するもの、それ自体のほかには目的をもたない
- ・ レジャーによる新しい有償労働の誘発→社会の分裂 19
経済の領域のなかにいる過剰に活動的な階級とそれから排除された大衆
経済エリート（より多く働き、より多くの収入を得る）VS 社会的に排除される者
エリートのレジャー → 経済領域から排除された大衆の一部に低賃金の不安定雇用再生産労働を召使い（排除された者）に依頼
- ・ 2 世紀にわたって生きてきた産業主義ユートピアの崩壊
生産力の発展と経済領域の拡大→希少性、苦難、不公正から人間を解放というユートピアを変えねばならない
「技術進歩」は、自由時間の内容と意味の問題、言いかえれば自由時間が労働時間よりもはるかに長く、その結果、経済合理性が人びとの時間を支配しなくなった文明と社会がどのような性質をもつかという問題を必然的に生み出すのである」(18)

2) 労働のメタモルフォーズ

①労働の発明：労働という近代的概念：マニュファクチュア資本主義から生まれた社会的同化と市民権の基盤をなす労働は人類学的カテゴリーとしての労働と同じではない労働の経済的合理化→労働と消費にける疎外、労働と必要の貨幣化→労働と必要の限界を超える経済的合理化

②マルクスにおける労働ユートピア

- ・ 共産主義というマルクスのユートピア： 社会的労働と個人的活動との一致

③機能的統合あるいは労働と生の分裂

- ・ 他律性の領域：外から調整された機能で専門化した活動全体

2つのタイプの他律的調整 65

①市場による調整：外的でまったく意図しない結果に合わせて自分の行動や計画を変更

②プログラム化された他律的調整：官僚制、行政機構

- ・機能的統合から社会的脱同化へ：フォーディズムと福祉国家の社会学的分析
労働の外での奨励的調整手段：労働は代償を手に入れるための手段→フォード主義的調整の構成要素としての消費文化、創作者・生産者を労働者・消費者に転換させる教育の必要性、消費によって社会化された個人＝家族や社会の絆の分断
- ・福祉国家：機能的労働者・消費者に自律性の喪失に対する社会的代償を提供 88
消費文化による社会化が引き起こした自律的調整の衰退を埋め合わせねばならない

⑤労働ヒューマニズムの終焉

- ・労働者の世界の分裂→創作者・生産者階級と労働者・消費者大衆（単能工OS）
労働者・消費者大衆のユートピア：労働のなかでの解放よりも労働からの解放
- ・単能工による課業のテイラー主義的細分化への反乱（集団欠勤、山猫ストライキ、サボタージュ）→産業全体の混乱、賃金コストの上昇
経済の観点からすればもっとも合理的な労働の組織化：機械による他律的調整→労働者の協力の精神は不必要、奨励的調整（生産性賃金）による消費社会への労働者の統合
単能工の反乱→労働の合理化が限界に達したことを示す、経済的合理性の要求の追求では、最高の経済効率を達成できないことを示す
- ・完全な方向転換：日本モデルに基づく労働の危機の解決
中核になる労働者：安定雇用、技能資格、協力精神、会社への忠誠心
周辺の労働者：不安定雇用、無資格労働者、単能工
人的資源の新たなイデオロギー：経済効率は経済的合理性ではなく、企業の雰囲気や労働への満足度、協力するときの社会関係のよさから生まれることを暗黙に認めている

⑥労働イデオロギー、最後の変身

- ・個人と集団の自発性の開花の場として考案された企業：人的資源というイデオロギー
労働社会は時代遅れになった、経済は万人が働くことを必要としないという事実、安定的常勤雇用の構造的不足と構造的な労働力過剰という事実を隠しておく必要性 1 2 2

・労働力の構成

安定的中核 25%：安定雇用対柔軟な専門職（企業特殊的技能）

新しいタイプの企業に同化した特権的労働者：できる限り多く働くという労働倫理

周辺の労働力：二つの層からなる 事務、監督、設備の保守点検・検査の常勤、臨時雇用、パートなどの不安定雇用層

・ユートピアを変える必要性：万人の常勤労働（労働愛のための労働）→万人のための時間短縮＝労働の再分配→分断を生まない社会

⑦ポストマルクス主義の人間の条件 156

労働の分配を政治的に実現する社会的主体の不在→自由時間に人間を開花させる労働の文化を生み出さなかった 1 5 7

社会的に必要な労働量の減少に意味を与えることができるもの：労働の再分配のみ 158

マルクスのユートピアの倫理的内容の継承：人間性の自由な開花

複雑な社会：他律性が自律性に置換わることはない＝他律性のなかでの自律性の拡大
自律的活動と他律的活動、自由の領域と必要性の領域の対立という考え方の見直し

ゴルツの著作と研究文献

Andre Gorz(Michel Bosquet)

(1958)Le Traître ,Seuil. 権寧訳『裏切者』紀伊国屋書店.1971年

(1959)La moral de l'histoire ,Seuil. 権寧訳『疎外論の構造』合同出版社、1972年

(1964) Stratégie ouvrière et néocapitalisme, Éditions du Seuil. 小林正明・堀口牧子訳『労働者戦
略と新資本主義』合同出版、1970年

(1967) Le socialisme difficile , Seuil. 上杉聡彦訳『困難な革命』合同出版、1969年.

(1973) Critique du capitalisme quotidien , Éditions Galilée.

(1975) Écologie et Politique, Éditions Galilée. 高橋武智訳『エコロジスト宣言』緑風出版、1983
年

(1977) Écologie et liberté / Michel Bosquet (André Gorz), Éditions Galilée.高橋武智訳『エコロジ
スト宣言』緑風出版、1983年

(1980)Adieux au prolétariat : au-delà du socialisme , Éditions Galilée.

(1983)Les chemins du paradis : l'agonie du capital / André Gorz. -- Editions Galilée. 辻由美訳『エ
コロジ-共働体への道：労働と失業の社会を超えて』技術と人間、1985年

(1988) Métamorphoses du travail, quête du sens : critique de la raison économique, Galilée. 真下俊
樹訳。『労働のメタモルフォーズ：働くことの意味を求めて』緑風出版、1997年

(1991) Capitalisme, socialisme, écologie : désorientations, orientations, Galilée. 杉村裕史訳『資本
主義・社会主義・エコロジー』新評論、1993年

(1997)Misères du présent, Richesse du possible, Galilee.

研究文献

Adrian Little (1996)The political thought of André Gorz, Routledge.

Finn Bowring (2000)André Gorz and the Sartrean legacy : arguments for a person-centered social
theory, Macmillan.

水島茂樹(1981)「現代フランスにおける社会主義像の模索」『社会思想史研究』1981年第5
号

小倉利丸(1990)『搾取される身体性』青弓社（「アンドレ・ゴルツの労働論」）

ヤンパス 法・経総合研究棟 2F 大会議室

資料費：500円

市場個人主義の猛威がワーキング・ペア、非正規雇用の増大、相変わらずの過労

死状況を生みだしているかと思えば、NPO、社会的企業、コミュニティ・ビジネスなど賃労働を超える新しい働き方への関心も高まってきています。こうしたなか、新自由主義的市場経済のもとでの働き方を乗り越え、人間発達に繋がる“労働”の回復を展望しながら、“労働”の思想的探求を行いたいと思います。

折しも、「賃労働社会」からの脱却と「時間解放社会」の実現を訴え続けてきたフランスの社会思想家 A.ゴルツの死去が9月末に伝えられました。こうしたゴルツへの追悼的な意味合いも込めて、研究会を企画しました。

多くの方がご参加いただきますようご案内いたします。

<報告者>

若森章孝(関西大学経済学部教授)

「アンドレ・ゴルツ(1924～2007)の労働論」

櫻井純理(大阪地方自治研究センター研究員)

「なぜ、「働きすぎ」なのか～長時間過密労働の実態と要因」

小沢修司(京都府立大学福祉社会学部教授)

「ゴルツとベーシック・インカム」